I・カント「人は哲学を学ぶのではなく哲学することを学ぶのだ。」

○人間とは何か

①神性と獣性の間隙的存在

②問いの難解さ→ソポクレス著「オイディプス王」にも示されている。

（1）：顔と胸は人間の女、原寄りしたと手足がライオン、わしの翼をもつ怪物。

旅人を捕まえてクイズを出す。答えられないと食べる。

※オイディプスの話はノートを読んでおく。

○動物との差異からのアプローチ

1、（1）の使用→生育範囲の拡大につながった（熱帯から寒帯へ）

2、（2）の制作や、（2）が複雑化・機械化→文明水準向上→個体数増加

3、二足歩行

4、（3）を持つ。→論理的に物事を考え（因果、相関（類比・具体化、対比など））

→手段として言語が必要。

5、（4）、娯楽→小さいサルや犬と遊ぶが、狩りや敵から身を守る手段の訓練としてのもの。人間はその必要がないのに大人になっても遊ぶ。←（5）の発達が関係している。

理性を司る（5）新皮質が動物的欲求を抑圧しているので、その（6）を解消する手段（7）として娯楽（学問、芸術の域に達する）が開発されたのではないか。

○人間とは何か

（1）：（2）が提唱。理性を持つ生き物。

（3）：（4）が提唱。道具を用いて物を作り出す生き物

（5）：（6）が提唱。遊ぶことから文化を創り出す生き物

（7）：言語や記号などのシンボルを用いる生き物

（8）：宗教という文化を持つ生き物

（9）：欲望を合理的に満たすため、経済活動を行う生き物

（10）：言語を操る生き物

○考えるとは

「人は哲学を学ぶのではなく、哲学することを学ぶのである」

→哲学は思想についての＜知識＞だけでなく、思索の継続という＜行為＞。

（1）の「（2）」では、「人間は考える葦である」としている。

自然界の中では生命力の低い弱い動物であるというたとえ。

しかし、「考える」ことは、人間のみが行う。人間の尊厳の根拠、人間性の維持には

＜考える＞という行為が必要。

「（3）」（孔子）：「学びて思わざれば則ち罔し、思いて学ばざれば則ち殆し。」

→＜学ぶ＞＜思う＞のバランスが大事

○青年とは

→子供と大人の間。このようなとらえ方が始まったのは13～17C。←このようなとらえ方が始まった原因は就学期間の（1）、（2）など。→（3）「エミール」：「（4）」

※（5）は青年期の人を「（6）」とした。

（7）の「（8）」：社会的責任や義務が猶予される期間。

青年期の始期：思春期。第二性徴の発現期。

青年期とは何か

（9）：始期ほど明瞭でない社会構造の複雑化や就学期間の延長などが原因。

→（10）が達成され、社会の中で責任ある人格として認められたころ。

（11）（アメリカの心理学者）による青年期の発達課題

（12）：同年齢の男女との洗練された関係。男女の身体の成長と構造の理解

（13）：親からの独立・経済的自立についての自信。職業選択の準備,結婚と家庭生活の準備

（14）：市民としての知識と資質の育成。社会的に責任ある行動。

（15）：自己の価値観や世界観の形成。

①（16）の確立、②（17）の解消方法の会得、③（18）の形成

（19）：修学期間後も親元で生活する若者のこと。

（20）：無気力・無感動・無関心な学生。

（21）：大人になることを回避する男性の特徴。

（22）：理想的な男性に依存しようとする女性の特徴。

（23）の欲求階層：欲求は常に充足されるわけではない。→欲求と環境を順応される必要。

適応不能に陥り、複数の欲求の中で苦しむー（24）→（25）（フラストレーション）

（26）欲求＞（27）欲求＞（28）欲求＞（29）欲求＞（30）欲求

葛藤の類型

1、（31）型：～もしたい、～もしたい。Ex.水を飲みたいし、コーラも飲みたい。

2、（32）型：～もしたくない、～もしたくない。Ex.留年したくないし、勉強もしたくない

3、（33）型：～はしたいが、～はしたくない。Ex.進級したいが、勉強したくない。

○フラストレーションの解消

意識的方法としては（（1）：Ex.安いから水にしておこう）と（（2）：Ex.水とコーラの両方を買う。コーラを盗んで手に入れる）がある。

無意識的方法には、（3）の防衛機制がある。

（4）：欲求を無意識のうちに押さえつける。

（5）：自分を納得させる理屈付け

（6）：他者の持つ特性を自分が持っていると思い込む。

（7）：自分自身の気づいていない欲求や感情を、他人の中に見る。

（8）：抑圧した欲求と反対の行動を示す。

（9）：空想や病気に逃げ込み、現実の苦しみを避ける。

（10）：以前の発達水準に逆戻りする

（11）には（（12）：ほかのもので我慢する。）と（（13）：社会的に価値ある行動に向かう）

ノイローゼの研究

患者の＜無意識＞に注目し、夢に出現すると考えた。

夢に性的象徴がある場合：神経症は＜性の抑圧＞が原因。

（14）≒（15）（プラトンの用語法とは異なる）：性衝動の快楽原則「リピドー」に支配され、あらゆる快楽を求める自我。

（16）：自我の検閲者であり、社会的適応を図る。

（17）：（14）と（16）の調整を図る。

（18）（フロイトの弟子）

個別的無意識、集合的無意識（普遍的）→（19）が前提とされる。Ex.母、父親像

パーソナリティの三要素には、（20）、（21）、（22）の三つがある。

パーソナリティと自我

習慣・単純で機械的な行動傾向→習慣が組み合わさると習性となる。

Ex.習慣：毎日顔を洗う。習性：きれい好き

習慣と習性の集まり＝パーソナリティ→パーソナリティの自覚＝自我の意識

クレッチマーによる分類 ユングの分類

（23）型―（24）：控えめでまじめ 　　　（29）：感情表現が豊か・決断力、実行力に富む

（25）型―（26）：社交的で温厚 　　　（30）：内気で繊細、理論的分析に長じている



（27）型―（28）：几帳面で熱中

○古代ギリシャの思想

神話→自然哲学→（1）の登場→（1）批判としての（2）

1、神話の世界

（3）「イリアス」「オデュッセイア」

（4）「仕事と日々」「神統記」.etc

世の中で様々な事柄を神話で説明する世界観／時代

（4）「神統記」

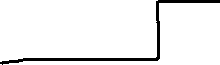
＜（5）＞（原初の神） 　クロノス



↓ 　レイア―



＜（6）＞（大地の女神）



|| 　＜（8）＞（法の女神）



＜（7）＞（天の神） 　　||

　　　 　＜（9）＞（ｷﾞﾘｼｬ神話の主神で全知全能の神）



＜（10）＞（秩序の女神） 　　　→（13）：ゼウスが人間に課した掟



＜（11）＞（正義の女神）

＜（12）＞（平和の女神） （14）

（15）性：刑事法など。（8）：神意に基づく権威的決定。←前定法的決定＝正しく知恵ある神意の現れ

（16）性：民事法。（11）：現在のほうをそのまま正しいとするのではなく、より具体的、個別的な場面（裁判など）における妥当な判断。「各人に彼のものを与えること。」

［ローマ神話では］

・（17）：ギリシャ神話の（8）or（11）と同一視（Justitia）→Justice(正義)の語源。

○自然哲学（紀元前6C～）

アルケー（万物の根源）に関心が寄せられた。神話を超えた学問的精神の始まり。

（1）：アルケーを水とする。（2）：アルケーを数とする。

（3）：アルケーを物事の流動性、変化、流転とする。世界は何かからできているのではなく、動き続けているとした。　Ex.火、「2度と同じ川に入ることができない」

（4）アルケーをこれ以上分解できないものとした。この最小単位をアトムと呼んだ。

（5）：アルケーを無限とした。（6）：アルケーを空気とした。

（7）：アルケーを「火、水、空気、土」の四元素とした。愛：結合原理、憎：離反原理

倫理的・政治的知識や弁論術を教える人を（8）という。知恵のよく働く人とも呼ばれる。

（9）：「ただあるものがあり、無いものは無い」→生成消滅・変化を否定。

ソフィストの登場

初期の代表的ソフィスト（10）「人間は万物の尺度である」

①絶対的な心理や価値基準は存在しない。②各々の判断が異なっていたとしても、その子となった判断がその判断者にとっての真理である。①、②を（11）という。

（12）（後期ソフィスト、紀元前4C前半ごろ）「何物も存在しない。存在しても知りえない。知りえても伝えることができない」：（13）論→主観的判断の絶対化

→真理について理性的認識・普遍的認識（妥当性）を否定。

（14）「強者の利益が正義」→道徳、倫理は存在しないのか？→殺人、窃盗も是とされるか？

後期授業ここから

<復習>

「倫理」…哲学、思想史→○○思想、宗教学、心理学、社会学。

→学問分野としての倫理学よりも幅広い領域を扱う。その中でも哲学分野が中心。

Philosophy（もともとは学問全体をさす言葉として用いられる）：信仰や信託を信じずに物事の原理などを探求すること。sophia(知)＋philos(愛情)

「ph, D in 学問」Dは博士の意味

School(英語)←scole＝暇、ゆとり、プラスの意味。スキルアップのための時間。精神修養、人格発達。

「人間」の特徴の類型←定義でない。ホモ＝サピエンス、ファーベル、ルーデンス、レリギオースス、シンボリクス、エコノミクス、ロークェンス。

「青年」の特徴など。

始期：思春期（第二次性徴の発現期）

終期：社会の複雑化、修学期間の長期化により長くなっている。

発達課題

エリクソン：アイデンティティの確立。ハヴィガースト：「性」、「独立」、「社会性」、「自我」

欲求について

マズローの五段階。適応：欲求と環境を調和させること。

欲求不満（フラストレーション）←防衛機制（フロイト）

＜復習終わり＞

古代ギリシャの思想

〇ソクラテスの生涯

前469頃 アテネ生まれ

前449頃 20歳頃 自然哲学の研究

前429頃 40歳頃 アテネ衰退に向かう。

関心対象が＜（1）＞から＜（2）＞へ移る。

青年を相手に＜（3）＞を始める。

（4）の神託を受ける。

前419頃 50才頃 （5）（悪妻として知られる）と結婚。「始終滑車のガラガラという音を聞いているようなもの」

前407頃 62才頃 （6）（当時20才頃）と出会う

前399頃 70才頃 刑死。

〇これまでのギリシア哲学の流れ

自然哲学→＜（1）＞

万物は何からできているか？

→ソフィスト→＜（2）＞

社会でうまく生きていくための弁論術。

（3）→絶対的な正しさの存在

→（4）：よく生きるとは？（5）＝どうすべきか（倫理）

〇古代ギリシアの思想

（1）の神託：神託の意味がわからなかったソクラテスは、問答法で知者とされている人たちと対話をしてみた。知者とされている人たちは、知らないということを知っていると思い込んでいた。→＜知らない＞ということを知る（自覚する）ことが大事

（「（2）」）。

デルフォイの（3）神殿「汝自らを知れ」元は「身の程をわきまえろ」程度の意味だが、（2）として解釈した。

（4）：相手の見解内部での矛盾を突く＝（5）

（6）：見解そのものに対する批判→神々の闘争。価値観の対。

〇知と徳

人間にとって大事なものに気を配って正しく（善く）生きることを重視。→善い能力：（1）：知的活動によって導かれる→究極的最終的には知と徳は一体化する（2）

→人間は理性によって徳/理想に到達できるだけの能力があると考えた←楽観的人間観（←キリスト教的人間観）

〇死刑判決

ソクラテスの知的活動（ex.（1）、⇔信仰・信託）は市民をより聡明にさせる契機となりうる。→政治に対する批判能力をつけた市民が増える→為政者にとって脅威化する。

→青年たちを堕落させた（＝信仰、神託を軽視するような傾向を持たせた）として宗教裁判にかけられ死刑判決。

陪審員に向けたソクラテスの言葉

「君たちは評判や地位のことを気にしても、思慮や真実のことには気にかけず、魂をできるだけ優れたものにするということに気を遣わず心配もしていないとは…」（「（2）」）

ソクラテスの弟子たちによって外国逃亡の機会を得るものの拒否←＜（3）＞→不正に対して不正で返すことはできない。

→毒杯をあおって刑死

〇ソクラテスとプラトン

ソクラテス以前のソフィストたちが（1）思想であるのに対して、ソクラテスは（2）思想（ex.善や美の探求＝黄金比など）→（3）にも継承される。

〇プラトンの生涯

前427 アテネで出生

前407 20才 （1）の弟子となる

前399 28才 （1）の刑死を受けて一時隣国に逃亡

前387 40才 アテネ郊外に学園＜（2）＞を創設

前367 60才 （3）（当時17才）が（2）に入学

前347 80才 死去

プラトンは当初（10代後半ごろ）政治家を死亡していたが師匠ソクラテスに対する死刑判決で政治に失望し、哲学者を目指すことになる。

プラトンの著作 44編

―（4） 15作…偽作？

―（5） 1作（13通）

―（6） 1作

―（7）27作…真正の著作

〇真正の対話篇の著作

27作品の分類

［（1）］：30~45才頃。

アカデメイア創設以前の作品が中心。ソクラテスを主な登場人物とし、彼の思想を伝えるものが多い。（2）+（3）の15編ある。

「（3）」は中期に含める解釈あり。

［（4）］：45~60才頃の作品

第2回（5）旅行までの作品が中心。

プラトン思想の中核である（6）も登場する。

（7）+（8）＋（9）の6編ある。

（8）、（9）は後期に含める解釈もあり。

［（10）］：60~80才頃の作品。

第2回（5）旅行以降の作品が中心。

（6）の再検証が行われる。

（11）の6編ある。

〇イデア論

“三角形を書いてください。”

* ← 幾何学的定義に厳密に合致しないにもかかわらず三角形めいた図形を三角形として認識することができる。

→三角形の真の姿・形・原形（1）がわかるから三角形らしさを分有している。

（2）には二つの世界があるとしている

―（3）：今正に我々の肉体が存在する世界

―（4）：イデアが存在する世界。

↑我々は生まれる前にイデア界における様々なイデアを目撃しているから。Ex 現象界における不完全な三角形の図形を三角形として認識可能になる。←イデア界におけるイデアを想起する（5）。

→不完全な現象界における我々の魂はイデア界におけるイデアにあこがれを抱き、求める傾向にある。→（6）（「（7）」より）

［洞窟の比喩―イデア論］

洞窟の影が現象界、元の図形をイデア界とする比喩。

（8）：男女が一体となり、翼が生えたもの。

人間はもともとイデア界で結合していた状態だったので現象界において相互に求め合う。

〇四元徳と哲人王政

魂を人型とし、頭、胸、腹で分ける。

頭：（1）→善悪判断やイデア認識を行う。

胸：（2）→現象界に属する肉体に結びついている本能的欲望。

腹：（3）→（1）と（2）を仲介する。

（4）：三者が与えられた役割で発揮して魂全体の調和が保たれるとき、（5）の徳が実現される。→このような調和性は国家運営においても必要。

（6）―統治者（政治家）

（7）―戦士（軍人防衛者）

（8）―生産者（一般庶民）

統治者が戦士と生産者を正しく統治するときに正義の国家が実現する。

→哲学者が王となるか王が哲学を学ぶか（権力と哲学の併存が理想）＝（9）

プラトンにとってポリス（「国家」）の運営は完全な（10）、（11）が貫徹されるということ。

ポリス（国家）における（12）（全体秩序と調和）は、「各々がポリスにおいて自己の本性に最も適合した1つの機能を果たす」ことで実現される。

〇哲人王政の実践と挫折

BC 367年 60才頃

伊・シケリア島の都市国家（1）に渡り、王（2）の教師となり、哲人王政を実践しようとするも挫折→このような経験から、後期対話篇の一つである「（3）」では哲人王政論が変質。哲人王政の＜（4）＞、＜（5）＞として“（6）”あるいは“（7）（知者が制定した方が遵守されている状態）”に関心を寄せる。→こうした傾向は最後の対話篇「（8）」において強化される。

→（9）と（10）の混合政体を理想とする。

法―（11）（ソフィストたちの考え）：神的なものに基礎を置く（12）的［プラトンにとっての方の目的など］（cf「（8）」）

権力の乱用防止や違反者の処罰。

神々への尊敬や市民の徳の涵養（かんよう）。

→披治者が自発的に法を遵守すべき←威嚇や強制よりも説得や勧告によるべき。

〇プラトンの哲人王政思想の変遷

「国家」→「政治家」→「法律」→最後

この中においてプラトンの法思想・国家思想は（1）的な方向から（2）的なものへ変化したが哲人王政論が完全放棄されたわけではない。

〇アリストテレスの生涯

前384 ギリシアの（1）で出生（父：ニコマコス）

前367 17才 アテネに行きプラトンの（2）に入学。「自然学」「形而上学」など執筆

前347 37才 プラトンの死後アテネを去る。

前342 42才（3）に招かれ、王子（4）の教師に。

前335 49才 アレクサンドロスの援助でアテネに＜（5）＞という学校を設立。

前323 61才 アレクサンドロス大王の死後アテネに去る。

前322 62才 死去

〇アリストテレスの思想

特徴

現象界に存在する個物の内側に着目。物事の本質や役割は現象界外にあるのではなく、現象界における個物の内側にある。（⇔プラトンの二元論的世界観）

［四原因説］

存在する事物・個物の中には四つの原因がある。

（1）因→そのものの材料となるもの。

（2）因→そのものの形を示すもの。Ex.設計図

（3）因→そのものの質料（材料）に及ぼされる力。

（4）因→そのものの存在目的

世界は運動する→変化成長

ヒュレー（木材）…（5）（可能態） → エイドス（机）…（6）（現実態）

絶対的関係ではない。個物におけるデュミナス、エネルゲイアの関係は相対的。

Ex.種→木→木材→机　（ヒュレーがエイドスを獲得する）。

（7）：完成された世界の形＝（「（8）」≒（9））

これを作るのは「第一の不動の動者」＝神とする。

これらは全て１方向であるため、最高善に向かうとされている。これを目的論的自然観とする。⇔自然哲学におけるアルケーの探求

↑これらは「（10）」に書かれる。

〇アリストテレスの学問体系

（1）：自然学、数学、形而上学

（2）：政治学、倫理学、家政学

（3）：詩学

演繹（えんえき）に帰納を用いる論証。

〇アリストテレスにとってのアレテ―（徳）

（1）：思慮（感情や欲望を抑える）や知恵（理性によって心理を認識）によって獲得。

（2）：習慣づけによって獲得　→知性的徳を身に着けることで実現。

→（（3）＝過多でもない）を目指すことが重要。

↑これらは「（4）」、「（5）」に書かれる。

〇＜人間はポリス的動物である＞

人間は善を目的とする動物であり、ポリスも善を目的とするから人間がポリスを持つのは自然的なこと。人間が他の動物よりもポリス的であるのは言葉を用いるから。→人間の言葉は理・不利/善・悪/正・不正/を示すためにも用いられる。

［ポリスの発生順序］

ポリスというエイドスは、村落という（1）を基に善を（2）とする共同体。

［ポリスの目的的順序］

身体全体が滅びて手足だけが存在するのはあり得ないからポリスは人間に優先する。

〇正義論

（1）―遵法的であること。

（2）―配分的正義：能力に応じた配分（幾何学的比例関係）

（3）：「取引（交渉）」―（4） ex.売買、（5） ex.殺人

↑は不均衡の是正（算術的比例）＝各人の価値は考慮外

交換（応報）的正義：A⇔B

〇国制論

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 単独 | 少数 | 多数 |
| 純粋形態 | 君主制 | 貴族制 | 「国制」（共和政） |
| 腐敗形態 | 僭主性 | 寡頭制 | 民主制 （衆遇制） |